＜２０１６年７月＞

いつまで生きてるつもり？

国保連合会嘱託　東田（ひがしだ）　文男（ふみお）

Ｃｏｌｕｍｎ

「いつまで生きてるつもり」。こんな言葉を政治家からではなく、身内から言われる時代になるのかもしれない。「人生 100 歳」時代といわれる。100 歳まで生きられるようになったと考えるのか。それとも、100 歳まで生きなければならないと思うのか▼「６月」は、年金生活者の当方にとって憂鬱な季節である。役所からいろんな納税の通知書がやってくるからだ。65 歳という立派な「老人」になったということで、今年からは国保料や介護保険料、個人住民税は年金から天引きするというのである▼これといった財産や蓄えがあるわけではない。納税通知書をちょうだいするたびに、否応なしに不安に襲われる。そして、自問してしまう。予想以上に長生きしたら、どうしょうか、と▼20 数年前、「きんさん・ぎんさん」という 100 歳を超える双子の姉妹がおられた。屈託のないおしゃべりでお茶の間の人気者となり、テレビの出演料を何に使うのかと聞かれ、「老後にとっておきます」と、茶目っ気たっぷりに答えられたのを覚えている。しかし今のシニアにとってはうなずける答えではないだろうか▼超高齢化で社会保障費は増える一方だ。支え手の現役世代から悲鳴の声が上がる。われらシニアとて、自分だけよければなぞとは思ってはいない。子どもや孫の世代につけは残したくない▼これまでは子どもが「早死」することが「親不孝」だったが、これからは親が「長生き」することが「子不孝」になるのだろうか。できる限り家族には迷惑をかけたくないと思っている。でも、家族からそれとなく「いつまで生きてるつもり」と聞かれたら、あなたはどう答えますか。